



Data

監督・脚本：クリストフ・バラティエ

出演：ジェラルール・ジュニョ/クロ
ヴィス・コルニアック/カ
ド・メラッド/ノラ・アルネ
ゼデル/ピエール・リシャ
ール/ベルナル・ピエ
ール・ドナデュ/マクサン
ス・ベラン

👁️👁️ みどころ

第2次世界大戦前夜の1936年という時代状況を意識した、パリ北部下町にあるシャンソニア劇場をめぐる人間ドラマは実に面白い。やはり、これがクリストフ・バラティエ監督の、そしてフランス映画特有の良さ？本作をより正しく鑑賞するためには、大戦前夜のヨーロッパ、とりわけフランスの世相を正しく把握することが不可欠。とりわけ、日本人は1931年の満州事変、1937年の盧溝橋事件との関連で本作を鑑賞し、日仏比較をしてほしい。そこまで意識せずとも、温かい人間模様があなたの心を満足させてくれること確実！

大戦前夜、シャンソニア劇場では？

日本は1928年6月4日の張作霖爆殺事件、1931年9月18日の満州事変、1937年7月7日の盧溝橋事件によって、日中戦争への道をひた走っていった。他方ヨーロッパでは、イタリアが1928年12月9日にファシスト党独裁政権体制を確立、ドイツでは1933年1月30日にナチス党のヒトラーが首相に就任し、第2次世界大戦前夜の様相を呈していた。本作が描くのは、そんな歴史的背景のある1936年という時代の、パリにあるミュージックホール、シャンソニア劇場をめぐる人々の人間ドラマ。

とはいえ、冒頭はえらく陰鬱で、本作の主人公であるピゴワル(ジェラルール・ジュニョ)が警察の取り調べを受けるシーンから始まる。それをチャリとみせた後、映画は1935年大みそかのシャンソニア劇場の様子とカウントダウンの様相を映し出していく。劇場内は結構盛り上がっていたが、1929年の世界大恐慌以降アメリカも日本もヨーロッパも

景気が悪化し、実はシャンソニア劇場の経営も火の車。劇場支配人は不動産屋のギャラピ
ア（ベルナル・ピエール・ドナデー）から借金の取り立てを迫られ、カントダウ
ンの終了と同時にピストル自殺。これによってシャンソニア劇場はギャラピアに取りあげら
れ、閉館という最悪の事態に。

他方、長年シャンソニア劇場の裏方をやっていたピゴワルは妻の不倫という現実を目の
前につきつけられたうえ、妻はピゴワルの前から逃亡。新しい職にも就けないまま、ピゴ
ワルは大不況の中、息子のジョジョ（マクサンス・ペラン）と2人でわびしい暮らしを余
儀なくされることに。

息子はアコーディオンの天才？ラジオ男とは？

陳凱歌（チェン・カイコー）監督の『北京ヴァイオリン』（02年）は、バイオリンの天
才少年を主人公とし、父親との絆を描く感動作だった（『シネマルーム5』299頁参照）。
これに対して、ピゴワルの息子ジョジョも、天才とまではいえないものの、アコーディ
オンを弾いて小銭を稼いでいるらしい。ちなみに、ジョジョにアコーディオンを教えている
のは、ラジオばかり聴いて家から一步も出てこないラジオ男（ピエール・リシャル）だ
が、このラジオ男が後半重要なキーマンとして登場するから要注目！父親のピゴワルはそ
んなジョジョの行動を全く知らなかったが、彼がこの不況の時代に近所の店から食品を
ツケで買うことができるのは、ジョジョが裏で店に代金を支払っていたためだ。

ところが、フランスはこの時代でも子供の人権にうるさい国？ジョジョの行動は未成年
者の物乞いにあたるとして警察に補導されたうえ、定職を持たない父親ピゴワルは子供
の扶養資格なしとされ、ジョジョは立派な男と再婚した母親の元へ半強制的に引き取られ
ることに。さあこんな風に八方ふさがりのピゴワルは、これからどんな身のたて方を？

あの時代も、やっぱりフランスは日本と大違い！

大戦前夜の日本では軍部の力が台頭し、政党政治そのものが危うくなっていったうえ、治
安維持法の制定、改悪によって天皇制打倒を叫ぶ日本共産党のみならず自由主義思想全般
に対する弾圧が激しくなっていた。ところが、同じ時代フランスでは？本作では1936
年5月の選挙で人民戦線派の勝利、レオン・ブルム内閣の成立が大きく報道されるが、さ
てそんな歴史上の事実を知っている日本人はどれくらい？

本作に登場する面白い男の1人が、洗濯工場のストをさかんに扇動している労働運動の
闘士（？）ミルー（クロヴィス・コルニアク）、「赤軍に属していた」などとカッコいい
ことを言っているが、実はこれはまっ赤なウソ。そのことを、その後に登場する歌姫ド
ーヌ（ノラ・アルネゼーデル）に告白するから、決して悪い男ではないが、こんなに血の

気が多いと何かと事件を起こしそう？このミルーがすんなりドゥースと恋仲になっていくのは意外だったが、もちろんその後はさまざまな紆余曲折が・・・。

それはともかく、大戦前夜の1936年5月に人民戦線政府が樹立し、その後の労使交渉により週40時間労働制が確立したらしいから、同じ時代ながらフランスと日本の違いにビックリ。もっとも、1938年4月には第2次ブルム内閣が総辞職し、人民戦線も事実上崩壊してしまったから、結果的には大同小異？

複雑なギャラピアの人格にも注目！

強引な借金の取り立てでシャンソニア劇場を手に入れたギャラピアだったが、モノマネ芸人だったジャッキー(カド・メラッド)がある日閉館中のシャンソニア劇場に入り込み、近所の人たちに芸を披露していたところから大問題が発生する。ギャラピアの手下がそれを解散させ、劇場内から追い出そうとしたのは当然だが、そこに血の気の多いミルーが飛び込んで一触即発の状態になったところで、なぜかピゴワルが「劇場を占拠する！」と宣言したから大変。こりゃある意味当時ニッチもサッチもいなくなっていたピゴワルのヤケのヤンパチ宣言だったが、ラッキーだったのは、ここでギャラピアが「寛容王になってはどうか？」とのアドバイスを聞き入れたこと。ここらあたりのギャラピアの人格の変化が面白いから、是非注目を！

これによって一カ月の猶予期間が与えられたピゴワルは、新たなシャンソニア劇場の支配人としてかつての劇場の仲間たちを呼び集め、劇場再建にひた走ること。こりゃある意味で近時話題となった松竹歌劇団(SKD)の再建劇と同じだが、当時の新聞も失業者たちによる劇場の自主再建と大きく報じてくれたから、ひょっとして追い風が・・・？

紅一点の魅力は？その役割は？

本作の紅一点は、シャンソニア劇場のオーディションを受けるためにやってきた若い娘ドゥース。このドゥースに一目ボレした(?)ギャラピアは、パトロニックに彼女を応援。他方、その美しさと歌声のすばらしさに、ピゴワルもミルーもジャッキーも魅了されていくことに。新装シャンソニア劇場の公演初日のジャッキーのモノマネにはブーイングだったが、満員の観客はドゥースの歌声に拍手喝采を。

こうなれば、カネのない新装シャンソニア劇場は花形スターのドゥースの魅力だけでかろうじて持ちこたえていたが、有名な音楽プロデューサーから目をつけられたドゥースは結局引き抜かれシャンソニア劇場を見捨ててしまうことに。これにて、ドゥースとミルーとの間に生まれかけていた恋もジ・エンド。そして、光が見えかけていたシャンソニア劇場の再建も元の木阿弥。私の目にはそう見えたから、いくら魅力的とはいえ、そんな結果

を黙認したドゥースはちょっと冷たくて利己的な女？



(C)Cos Aelenei

ストーリーの大きな転機は？

本作の起承転結の「転」にあたるのが、人気の出たドゥースの歌声をラジオで聴いていたラジオ男が突然引きこもりを中止したこと。ラジオ男はえらくめかしこんでピゴワルの元を訪れドゥースの消息を尋ねたが、そこではわからないとなると自らドゥースが出演している大きな劇場まで足を運んでいったから、ビックリ。彼は一体なぜそんな行動を？それは、かつてシャンソニア劇場のオーケストラ指揮者で作曲家だったラジオ男が、ドゥースの母親はシャンソニア劇場で昔大活躍していた歌手だったことを伝えるため。つまりドゥースは、ラジオ男の娘・・・？

まあ、そこらあたりはあなた自身の目で確かめてもらいたいが、ストーリーにそんな転機が訪れる中、ドゥースは再びシャンソニア劇場に戻る決心を固めることに。すると、恋仲になりかけていたミルーとの仲も復活？さらに、ラジオ男もオーケストラの指揮者兼作曲家として、シャンソニア劇場に復帰？

原題「Faubourg 36」の意味は？

本作の原題は「Faubourg (フォブール) 36」だが、このフォブールはフラン

ス語で「郊外」を意味する単語らしい。映画の冒頭、刑事の質問に対してピゴワルは「自分の所属はフォブールだ」と答え、「どこのフォブールだ」との刑事の再質問に対して、「フォブールは1つしかない」と答えるが、それこそがまさにフォブール36。つまり、映画後半に描かれるパラダイスはラジオ男の指揮の下、ドゥースが歌姫として縦横無尽の大活躍をし、ピゴワルやジャッキーそしてミラーまでが加わった新しい「フォブール36」の公演の大成功だ。

さらにそこに至るまでには、ピゴワルたちの苦勞をやっと知った息子ジョジョの復帰などフランス映画特有の心温まるエピソード満載だから、そこらあたりの感動はあなた自身の目でじっくりと。

シンプルなラストも感動的！

最近の製作委員会方式による邦画は何かと説明過剰気味で面白くないが、冒頭のシーンと直結した本作のラストはシンプルで実に感動的。他方、フランス映画には恋愛がつきもの。そして恋愛には嫉妬がつきものだ。「フォブール36」の大成功によってドゥースとミラーの仲が復活したこと、そして大きな興行収入をあげたことによってシャンソニア劇場の買い戻しのメドが立ったことが気に入らないのがギャラピア。そこで、ギャラピアが従来の「寛容王」路線を突如180度転換したから大変。

そこで起きたのが、フランス革命記念日前夜の悲劇だ。シャンソニア劇場を買い戻すためのお金の金庫番をしていたのは最も屈強な男ミラーだったが、この日ばかりはジャッキーが気を利かせて金庫番を代わってくれたため、ミラーはドゥースとのダンスにトコトン興じていたが、その間に大惨事が。つまりその夜、ジャッキーが何者かに襲われ金庫内の金がすべて奪われてしまったのだ。さあ、この犯人は誰？ その動機はナニ？ しかして、なぜ映画冒頭のように、ピゴワルが刑事の取り調べを受けているの？そこらあたりの種明かしとシンプルで感動的なラストはあなた自身の目でしっかりと。

2009(平成21)年7月9日記